様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１０日現在

機関番号：12102
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：21520426
研究課題名（和文）テキスト言語学的視点からのドイツ語助動詞文法化の多角的研究

研究課題名（英文）Diversified investigation into grammaticalization of auxiliars in German: a text-linguistic perspective

研究代表者
黒田　享（KURODA SUSUMU）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：00292491

研究成果の概要（和文）：
本研究においては、ドイツ語の各種助動詞の文法化の過程を多角的に調査した。研究の基礎資料としたのはコンピュータで処理可能な形式に加工した９世紀から現代にかけてのドイツ語の文献である。分析にあたってはテキスト言語学的視点を重視した。それに加えて、中間成果は国内・国外の関連分野の研究者とも共有した。研究の結果、助動詞文法化の進行の程度は文献のテキスト的性格ごとに差があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study was a diversified investigation into the grammaticalization process of various auxiliars in German. The research used texts in German from the ninth century to modern times processed into a computer analyzable form. In the analysis, the emphasis was laid on the text linguistic perspective. Moreover, the intermediate results were shared with researchers in related fields in Japan as well as abroad. This study revealed that the status of grammaticalization of auxiliars may depend on the nature of the text.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、言語学
キーワード：独語、歴史言語学、文法化、助動詞、歴史語用論、テキスト言語学

１．研究開始当初の背景

ドイツ語においては完了助動詞の haben や受動助動詞の werden など、助動詞として本来の意味機能とは大きく離れた文法的機能を担う動詞がある。このような、ある語が元の意味を失って文法的機能を担うようになる変化は「文法化」と呼ばれるが、文法化現象は一般言語学の枠組みでは 1990 年代より認知言語学や言語類型論の関連から特に重点的に論じられている。また、ドイツ語研究でも国内外において極めて重要なトピックの一つとなっている。研究代表者自身もドイツ語における各種の助動詞の成立の過程と文法化の進行過程についてこれまで長期に

わたって調査・考察を行ってきた。
　しかし、従来の研究には次のような問題点がある。
(1) 従来の研究では多くの場合、基礎データとして用いられる資料が文芸テキストに偏っている。また、本来文法化現象を論じる前提となるべき実証的言語史データが言及すらされない研究や、言及されてはいても辞書や先行研究など二次資料にのみに拠っている研究も見られる。
(2) 従来の研究では個々の助動詞が個別に議論されることが通常であり、助動詞の相互関係や機能上競合する他の表現形式との関係はさほど注目されなかった。そのため文法化の進行に伴う各種助動詞のドイツ語文法体系内での位置づけの変化についてはあまりわかっていない。
(3) とりわけ従来の研究でなおざりにされていたのは、助動詞が用いられるテキストの性格と助動詞の文法化の関連である。従来の研究では特定の性格を持ったテキストにおいてのみ見られる助動詞の用法（例えば文語においてのみ見られる drohen の陳述緩和用法）が一般的に現れる助動詞の用法と並列的に議論されてしまっており、一般的な文法化現象と特殊な文法化現象の差別化ができていない。
　以上が本研究を開始した当初の状況である。

２．研究の目的
　本研究では、以下のことを目指した。
(1) 9 世紀から現代までのさまざまなテキストから、コンピュータで処理可能なテキストデータベースを構築する。その際、古いドイツ語の資料として用いるテキストには当時のドイツ語の姿を忠実に再現するものを選ぶよう配慮する。
　こうして構築したテキストデータベースに基づいて各種ドイツ語助動詞の文法化の進行過程を網羅的に捉えると共に、これまで知られていなかった言語事実を捕捉する。
(2) 調査結果の分析においては個々の助動詞の機能上の相互関係や機能上競合する他の表現形式との関係も視野に入れる。こうして文法化の進行を契機とする各種助動詞のドイツ語文法体系上の位置づけの変化を捉える。
(3) テキストデータベースには文芸テキスト以外の様々なテキストを含むようにする。そしてテキストデータベースの調査により明らかになった助動詞の文法化の進行過程や文法体系上の位置づけの変化がテキストの性格によりどう変わるかを捉える。

３．研究の方法
　研究方法において、本研究の独自性は以下の点にある。
(1) 断片的なデータや二次資料ではなく、テキストデータベースから網羅的に採集されたデータの分析に基づくことによりドイツ語の助動詞の文法化の進行を実証的・計量的に明らかにすることが可能になる。
(2) 各種の助動詞の相互関係や競合表現との関係も明らかにすることにより文法化の進行による助動詞体系の変化の全体像を明らかにすることができる。
(3) 本研究では助動詞の文法化の分析にあたってデータを抽出するテキストの性格を分析パラメータとして導入し、それによりテキストの性格が文法化に及ぼす影響を明らかにすることができる。
　本研究ではこうした方法により、これまで見過ごされてきた言語現象を捉え、説明が困難だった現象の解明の手がかりや新たな言語学上の知見を得ることを目指した。
　本研究の根幹を成すのはコンピュータで処理が可能な形にされたテキストデータベースの分析である。
　テキストデータベースは研究の全期間（平成 21 年度から平成 24 年度）に渡って段階的に構築された。その際に用いたテキストは以下の通りである。（タイトルは使用したテキストに従う）

・Der althochdeutsche Isidor (9 世紀始め)
・Tatian (9 世紀半ば)
・Otfrid von Weißenburg “Evangelienbuch” (9 世紀末期)
・Notker der Deutsche “Martianus Capella” (11 世紀始め)
・Notker der Deutsche “De consolatione philosophiae” (11 世紀始め)
・Notker der Deutsche “Categoriae” (11 世紀始め)
・Notker der Deutsche 聖書詩編 (11 世紀前期)
・Hartmann von Aue “Der arme Heinrich” (1190 年前後)
・“Speculum Ecclesiae” (12 世紀)
・Nibelungenlied (13 世紀始め)
・ “Summa theologica” (14 世紀)
・ “Das Innsbrucker Osterspiel” (14 世紀末期)
・H.J.C. Grimmelshausen “Simplicissimus Teutsch” (17 世紀後半)
・E. Kämpfer Heutiges Japan (18 世紀末期)
・ J.W. Goethe “Die Wahlverwandtschaften” (19 世紀始め)
・ G.W.F. Hegel “Phänomenologie des Geistes” (19 世紀始め)
・ H. Böll “Ansichten eines Clowns” (20

世紀後半)
・ J. Habermas “Kritische und konservative Aufgaben der Soziologie” (20 世紀後半)
・ J. Habermas “Hegels Kritik der Französischen Revolution” (20 世紀後半)

これらのテキストのうちの大部分は電子化された形でインターネットから入手できる。しかし、一部のテキストはインターネットから入手ができなかったので独自にテキストデータベース化を行った。研究当初、インターネットから入手できる電子化テキストには質が低いものが多かった。そうしたテキストは入手後、改めてチェックを行い、適宜修正した上で調査に用いた。また、古いドイツ語のテキストについては当時のドイツ語の状況を忠実に再現するよう留意した。

こうして構築したテキストデータベースから各種助動詞の用例を採集し、用例データベースを作成した。

本研究では用例データベースの分析におけるパラメータとしてテキストの語用論的性格が重要にある。調査対象テキストの語用論的性格を突き止めるにあたっては、V. Ágel/M. Hennig (2007)などを始めとして議論されている口語性測定モデルを参考にした。

研究の過程においては中間成果を関連分野の研究者と共有し、議論することで適宜検証し、研究全体の説得性を高める工夫をした。

年度ごとの具体的な研究内容は以下のようになっている。

研究初年度である平成 21 年度は、まず研究全体の方向性を決定するためにドイツ語助動詞の文法化に関する最新の研究動向を調査した。また、テキスト言語学的手法を用いたドイツ語史研究の研究成果についても調査を行った。

平成 21 年度はまず始めに文芸テキストを中心にテキストデータベースを構築した。その上でそこから動詞用例を網羅的に採集し、用例データベースを作成した(長大なテキストについてはその一部から採取した用例をデータベース化した)。これを利用しつつドイツ語の助動詞の文法化の調査を行った。10 月には名古屋市立大学でそれまでの研究成果を発表し、他の研究者と意見交換をすることができた。

平成 22 年度もテキストデータベースの構築を続け、研究を行った。ただし、テキストデータベース構築の際は学術書や実用書などの散文テキストを多く利用した。

この年度は慶応義塾大学、ワルシャワ大学（ポーランド共和国)、ポズナン大学（ポーランド共和国)、ジェローナグラ大学（ポーランド共和国）で研究成果を発表する機会に恵まれた。特にワルシャワ大学とジェローナグラ大学では世界トップクラスの研究者と意見交換をすることができ、研究の上で極めて有益であった。また、研究成果を基に学術雑誌論文を発表することもできた。

研究前半で得られた成果からは、特に古高ドイツ語期の調査が研究全体の視点から重要であることが明らかになった。そこで研究後半に入った平成 23 年度は、古高ドイツ語の分析を重視して研究を続けることにした。

この年度は宗教書を中心にテキストデータベースの拡張を続けた。その結果、ドイツ語の様々な歴史的段階において成立した文芸書や実用書、またその中間の性質を持つテキストを含んだ大規模なコーパスを得ることができた。

この年度の研究で特に着目したのは、テンス・ヴォイス・アスペクトなどの範疇に関係する各種助動詞とそれと競合関係にある他の表現形式である。また、研究の途中成果をベルリン・フンボルト大学（ドイツ連邦共和国）と上智大学において口頭で発表し、関連領域の研究者と詳しい意見交換を行うことができた。

24 年度は研究最終年度でもあるため、これまで構築してきたテキストデータベースを基に作成した用例データベースの総合的分析に重点を置いた研究を行った。

また、調査対象としたテキストのうち、特に初期中世のものを詳細に性格づける必要性が明らかになったため、この時代のドイツの言語使用状況に関する基礎的調査を行った。

年度終盤にはパッサウ大学（ドイツ連邦共和国）より招聘を受けて講演を行い、研究全体の成果について同大学の研究者と意見交換をすることができた。

４．研究成果

本研究によりドイツ語助動詞の文法化のこれまで未知であった側面が明らかになった。テキストの性格と文法化の関連はドイツ語以外の言語についても研究が少なく、本研究の成果はドイツ語研究の枠を超えて文法化現象に関する議論の深化に貢献できると考えられる。

ドイツ語史研究の観点から特に重要なのは、16 世紀に起こったと言われることが多いドイツ語の現在完了形の過去表現用法の定着がもっと早い段階に成立した可能性が高いことが判明したことである。また、この用法はテキスト上の環境にかなり依存することも明らかにできた。これにより、従来の研究の再評価につながる成果が得られたと言える。一方、現在完了形以外の助動詞については歴史的変化と資料のテキスト的性格と

の明確な関連は突き止められなかった。助動詞と競合関係にある接頭辞による動詞派生の用法についても同様である。

本研究を行った４年間にインターネットから得られるテキストデータベースの信頼性は急速に向上した。本研究を通じてインターネット上の様々なテキストデータベースに触れることで、それらを言語研究の資料として用いるためのノウハウを蓄積することもできた。これは今後の研究にも活用できるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
[1.] 黒田　享　「完了形の文法化再考-文体の視点から-」『慶応義塾大学日吉紀要　ドイツ語学・文学』査読無　49 号　2012 年 137-154 頁
[2.] Susumu Kuroda　“Struktur der donativ-ornativen Verben im Wandel der Typenmarkierung der desubstantivischen Verben”　『ドイツ文学』　査読有　141 号 2010 年　91-105 頁

〔学会発表〕（計８件）
[1.] Susumu Kuroda　“Gab es ,den Präteritumschwund’ im Deutschen?”　招待講演　2013 年 3 月 18 日　パッサウ大学(ドイツ連邦共和国)
[2.] 黒田　享　「ドイツ語の二つの過去表現 ― 日常語と文語を言語史的に見る」シンポジウム『日常的な言葉遣い―ヨーロッパの言語をめぐって』　2011 年 10 月 28 日　上智大学
[3.] Susumu Kuroda　“Akkusativierung im Althochdeutschen”　招待講演　2011 年 10 月 4 日　ベルリン・フンボルト大学（ドイツ連邦共和国）
[4.] Susumu Kuroda　“Perfekt im Althochdeutschen, textlinguistisch gesehen”　研究集会History and Typology of Language Systems　2010 年 10 月 8 日　ジェローナグラ大学（ポーランド共和国）
[5.] Susumu Kuroda　“Die Entstehung der analytischen Vergangenheitsform im Deutschen”　招待講演　2010 年 10 月 6 日　ポズナン大学（ポーランド共和国）
[6.] Susumu Kuroda　“Das althochdeutsche Verbalsystem aus textlinguistischer Perspektive”　研究集会 Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit　2010 年 8 月 3 日　ワルシャワ大学（ポーランド共和国）
[7.] 黒田　享　「完了形の文法化再考 - 文体の視点から -」　日本独文学会春期研究発表会　2010 年 5 月 29 日　慶応義塾大学
[8.] 黒田　享　「品詞転換要素としての動詞接頭辞―授与・装備動詞派生の歴史的変遷―」　日本独文学会秋期研究発表会　2009 年 10 月 7 日　名古屋市立大学

〔図書〕（計４件）
[1.] 高田博行他（共著）　ひつじ書房　『ドイツ語の歴史論』　2013 年　65-90 頁
[2.] Agnieszka Buk 他（共著）　上智大学ヨーロッパ研究所　『日常的な言葉遣い ― ヨーロッパの言語をめぐって』　2013 年 41-52 頁
[3.] Michail Kotin 他（共著）　Lang *Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit.* Band 17.　2013 年　83-88 頁
[4.] Michail Kotin 他（共著）　Winter *History and Typology of Language Systems* 2011 年　197-204 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
黒田　享　　(Kuroda　Susumu)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：00292491